清新二中だより

本校教育目標
１　豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
２　進んで学び、深く考える人（知性）
３　健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
４　責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
５　礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

いい顔はいい　―第３６回卒業式に向けて―

校長　白　石　　亨

一年間の終わりを迎えた教室には、そのクラスの歴史がある。

教室の壁には、運動会、けやき祭合唱コンクール、学年独自のパーフェクト賞など、実に様々な賞状が貼り出されている。どの賞状にもクラス全員の頑張りや、様々な熱い思いがたくさん詰まっている。また運動会の大きなクラス旗も堂々と教室壁面に掲げられ、長きに渡ってクラスを見守ってきた。クラスの団結や一体感を示す象徴だ。年度末の教室の中には、学級担任と生徒たちが共に歩んできた一年間の軌跡がしっかりと刻まれている。とりわけ３年生の教室においてはそれが顕著に感じられた。

目を引いたのが、３年生の教室後方の壁面にあった運動会のクラス写真である。

運動会の終了直後に、校庭に整列して撮影されたクラス集合写真。実にいい顔をしているのだ。全員が満足げな表情を浮かべ、やり切った充実感・安堵感が満ちている。この上ない笑顔が鈴なりになって並んでいた。

思い起こせば、３年生は本当によく運動会を牽引してくれた。特に全校生徒によるソーラン節。初夏を思わせる暑い日射しの中で、下級生を導きながら練習に取り組んでいた。ソーラン節の「構え」のポーズにおいては、頬（ほお）をつたわる汗もぬぐわず、身構え、微動だにせず、そして一挙に踊り出す。そろいの黒い半纏（はんてん）を身にまとい、きびきびと力強く、颯爽（さっそう）と舞い踊る姿は、今でも忘れることができない。先輩方が創り上げてきたソーラン節を継承し、自分たちの手で一層よいものにしようとする熱い気迫が迫ってきた。前を向いたキラリとした瞳が何とも言えないいい目をしていた。内面から湧き出る向上心がいい顔をつくり出していたのだ。

そう、いい顔と一口に言っても、その定義はなかなか難しい。しかしながら、少なくとも「顔の造形が整っていれば“ いい顔 ”である」という定義は成り立たない。“ キレイな顔 ”と“ イイ顔 ”は違うのである。

その意味からすると、合唱コンクールでの忘れられない３年生のあの顔もいい顔であろうか。

合唱コンクールの金賞、銀賞、銅賞の結果が発表された。体育館には大きな歓声と同時に、落胆とも思われる大きなどよめきが漏（も）れた。どよめきには金賞がとれなかったことへの悔しさ・悲しさがにじみ出す。あれだけ頑張ったのに‥自分たちの歌の方がよかったはず‥などの様々な思いが交錯する。結果の現実を受止め切れず、涙を流す生徒がいく人も見られた。目を真っ赤にして涙を流していた顔が、今でも脳裏に焼きついている。

最後の中学校合唱コンクール。どのクラスも金賞をとることに全力をそそいでいた。だからこそ金賞が取れなかったことに大きく落胆した。いい加減な気持ちや中途半端な気持ちであれば、決してこのようなことはない。人はどんなに努力して頑張ったとしても成し得ないことがある。現実社会では少なからずあることだ。だからこそ真剣に悔しがること、口惜しく思うこと等の体験は必要だと思う。そのときは我慢せずに涙をたくさん流してもらいたい。喜ぶ顔に限らず、悔しがる顔もとてもいい顔に思える。真剣だからこそ、いい顔はいい。

３月１９日。３年生はいよいよ「卒業式」を迎える。

卒業式は３年生の最後のひのき舞台だ。卒業証書を受けとるとき、一人ひとりが卒業式の主人公となる。このとき、３年生はどんな顔を見せてくれるのであろうか･･･。

卒業式は、卒業生を祝福する儀式ではあるが、同時に卒業生は今までお世話になった方々への謝意を示す大切な機会でもある。特に今日（こんにち）まで育て、支えてきてくれた保護者の方々へはしっかりと感謝の気持ちを表してもらいたい。では、どのようにして‥‥それは「いい顔」を見せることに尽きると思う。子どもの「いい顔」を見ることが、親としてはこの上ない幸せなのである。子どもの「いい顔」は大人たちを幸せにする不思議な力をもっている。卒業生のいい顔は学校の教職員にも沁み渡る。今までの苦労が報（むく）われる。中学校生活の中で幾（いく）たびも「いい顔」を見せてくれた３年生。３年間の「いい顔」の集大成をぜひ卒業式で見せてもらいたい。